
シンポジウム 5

増加する STI への診療戦略

座 長 黒 田 まゆら (倉敷成人病センター 泌尿器科)
和 田 耕一郎 (島根大学医学部泌尿器科学講座)

司会のことば

性感染症 (Sexually transmitted infections, STI) は泌尿器科領域全体においては狭い領域に過ぎないが、泌尿器科診療において避けて通ることはできない疾患である。また、診療科横断的な視点で診療にあたる必要性の高い疾患も含んでおり、知識をアップデートして診断と治療、予防やパートナーへの対応も行う必要がある。性の多様化とともに、STI の症状は、尿道炎、急性精巣上体炎だけではなく、男性同性間性的接触者 (men who have sex with men, MSM) でなくとも発症する直腸炎、潰瘍性病変、腫瘍性病変、帯下、下腹痛、口腔咽頭病変、眼病変、不妊症など多岐にわたる。したがって、性器と他病変の検査・診断・治療・予防をバンドルとして一元的に進めていくことが、蔓延する STI に対して必要な対応となる。

近年、感染者数が減少していた梅毒が増加傾向にあることが社会問題となっており、他の STI もコロナ禍でも減少したわけでは決していない。罹患者数の増加もさることながら、現在特に STI で問題となっているのは以下の点にある。梅毒では抗体検査による診断が複雑であり、治療効果の判定も難しい症例が少なからず存在することである。淋菌性尿道炎では淋菌の薬剤耐性が進行しているが、診断には薬剤感受性がわからない核酸増幅検査を実施する傾向が強くなっている。クラミジア性尿道炎では、パートナーが陽性で精密検査を主訴に来院した患者に対し、無症状で膿尿を認めなければ検査を実施せず、約 3 割ともいわれる陽性者を野放しにしてしまっている可能性が問題である。非クラミジア性非淋菌性尿道炎の代表であるマイコプラズマ・ジェニタリウムによる尿道炎では、どのタイミングで検査を実施するのか、という点で臨床医と保険審査に乖離があること、薬剤耐性が世界的に深刻であり、確立された治療法がない混沌

とした状況が課題となっている。性器ヘルペスや尖圭コンジローマでは、治療法はある程度確立されているものの、ワクチンを含めた予防法、再発予防や性行為が可能とする患者指導などについては、分かっていない点も多い。本シンポジウムでは、4 名のシンポジストを演者として迎え、増加する STI への診療戦略と題して、疾患別の現状と課題、マネジメント戦略をご講演頂いた。各演者と発表概要は以下の通りである。

・定平卓也先生 (岡山大学) には「増加する梅毒への診療戦略」と題し、梅毒の近年の発生状況のほか、泌尿器科医として押さえておくべき梅毒の症状を、自験例を交え紹介して頂き、さらに診断法、治療戦略についてわかりやすく解説して頂いた。特に、「常に梅毒を念頭に置いた診療」を強調して頂き、積極的に検査する重要性に関する内容が印象的であった。

・小林加直先生 (中国労災病院) は「淋菌・クラミジア感染症はなぜ減らないのか? 診断・治療の現状と蔓延防止の未来像」と題し、淋菌感染症の薬剤耐性の状況、性器クラミジア感染症の症状や治療のほか、蔓延防止のための啓蒙活動についての現状と未来像について解説して頂いた。

・松本正広先生 (産業医科大若松病院) は、「耐性化するマイコプラズマ・ジェニタリウム感染症への診療戦略」と題し、2022 年から保険適応となった核酸増幅検査とその実施状況、耐性化が問題となっている現状での治療戦略についてご解説頂いた。特に非淋菌性尿道炎においては、早期から積極的に核酸増幅検査をする必要性を強調された。

・渡辺隆太先生 (愛媛大学) は、「性器ヘルペス・尖圭コンジローマの診療戦略」と題し、性器ヘルペスについては症状と治療法のほか、最近我が国でも可能となった PIT (Patient-initiated therapy) 治療法について、その内容と効果について解説された。また、尖圭コンジロー

マについては選択すべき治療法の解説の他，2020 年から男性も接種可能になった HPV ワクチンについても，現状と展望について解説して頂いた。

本シンポジウムでは時間の関係もあり総合討論は実施できなかったが，現状の問題点と日常診療に役立つ Tips，今後の展望を共有することができたと考えてい

る。演者の先生方や聴講に会場された先生たがに感謝するとともに，これを機に泌尿器科医が STI に興味を持って診療にあたり，一人でも多くの患者が STI やそのストレスから解放されることを，司会を担当させて頂いた者としても期待したい。
